

## 研究・調査報告書

報告書番号	担当
268	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学
<b>題名 (原題/訳)</b>	
Late-life alcohol consumption and 20-year mortality. 人生後期におけるアルコール摂取と 20 年間の死亡率	
<b>執筆者</b>	
Holahan CJ, Schutte KK, Brennan PL, Holahan CK, Moos BS, Moos RH.	
<b>掲載誌 (番号又は発行年月日)</b>	
Alcohol Clin Exp Res. 2010 Nov;34(11):1961-71.	
<b>キーワード</b>	
人生後期、長期観察、禁酒者、総死亡	
<b>要 旨</b>	
<b>背景：</b> 多くの疫学研究の成果から、適度なアルコール消費が中高年の総死亡の減少と関連していることが示されている。しかしながら適度な飲酒の有益な効果は交絡因子の影響によって過大評価されていると思われる。禁酒者には、過去に問題飲酒を起し現在健康上の問題を持っている者が含まれ、社会人口学のおよび社会行動要因の点から飲酒者と比較すると非定型的な場合があります。本研究の目的は 1,834 人の高齢者を対象に、アルコール消費と 20 年間の総死亡との関連を、禁酒と関連する幅広い範囲にわたる潜在的な交絡因子を調整しながら検討することである。	
<b>方法：</b> ベースラインの対象者は 55 歳から 65 歳の間 1,824 人であった。ベースラインのデータベースには、毎日の飲酒消費、社会人口学的要因、過去の問題飲酒状況、健康関連要因および社会行動的要因に関する情報が含まれていた。禁酒はベースライン時のアルコール中断と定義された。20 年間の追跡期間における死亡は主に死亡証明書によって確認された。	
<b>結果：</b> 年齢と性別と調整したもとで適量飲酒と比較すると、禁酒者は 2 倍以上の死亡リスク、大量飲酒者は 70% のリスク増加、軽度の飲酒は 23% リスク増加があった。過去の問題飲酒状況、既にある健康上の問題および主要な社会人口学のおよび社会行動要因を調整したモデルは、年齢や性別を調整したモデルと同様、適量飲酒者に比べた禁酒者の死亡リスクをかなり減少させる。しかしながら、すべての共変量を調整した後でも、禁酒者や大量飲酒者は、適量飲酒者に比較して各々 51% および 45% の死亡率増加を示した。	
<b>結論：</b> 研究結果は、適量飲酒者と年をとった成人の禁酒者とを比較した生存効果が 2 つの過程を反映しているという解釈と一致する。第一にアルコール禁酒と関連する交絡因子の影響はかなりある。しかしながら、通常考慮されるべき共変量および新規の共変量を考慮してもまだ、適量アルコール消費は死亡リスク予測の上で有益な効果を示す。	